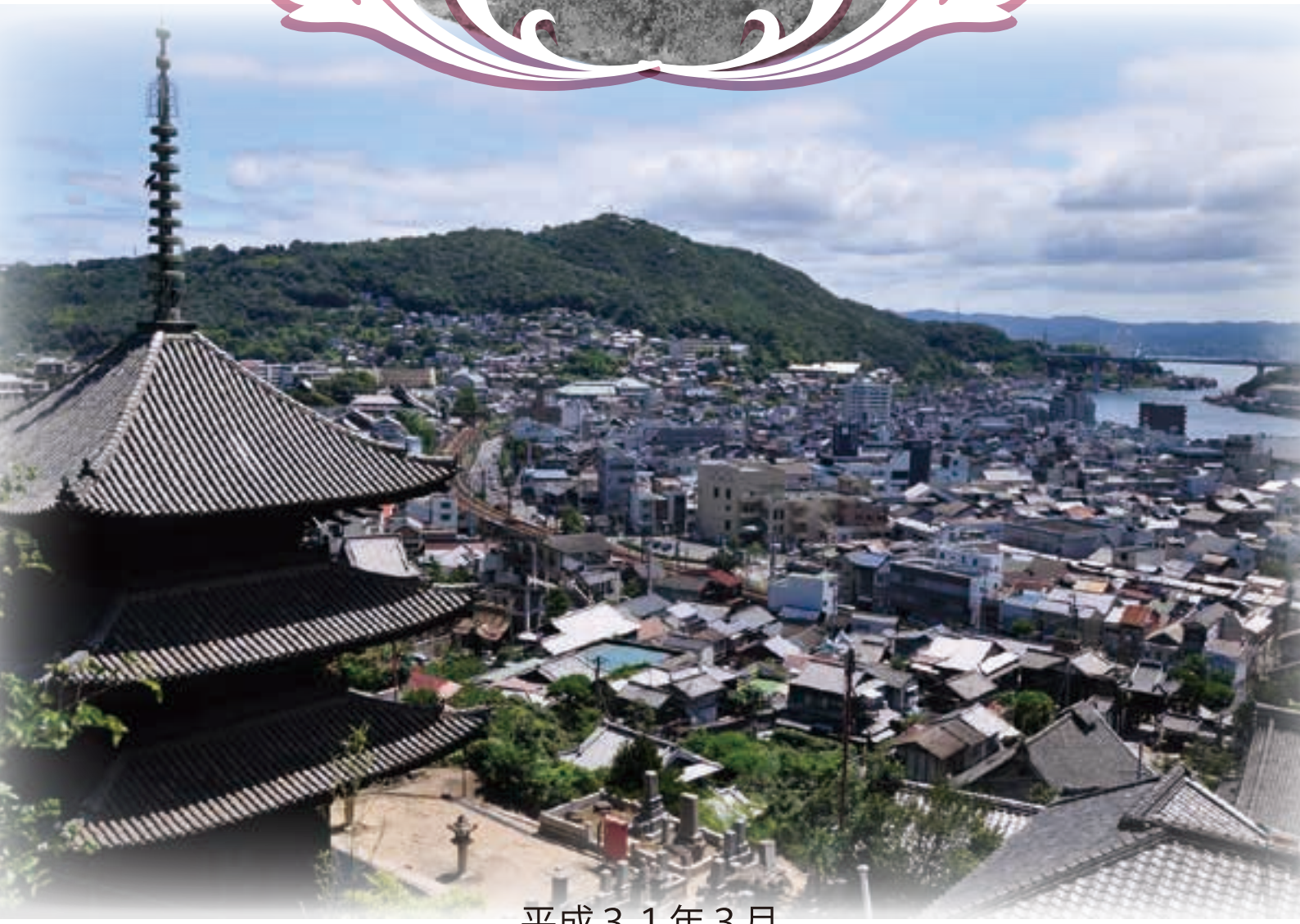
尾道の歴史と遺跡シリーズ６

中世尾道の甍（いらか）

-開港850年の港町尾道-



平成３１年３月

尾道市教育委員会

開港 850 年 – 港町尾道

天寧寺での瓦出土状況

尾道という名前はいつ頃から使われていたのでしょうか。
平安時代中期、永保元年（1081）に西國寺が再建されたとされる『西國寺文書』に尾道浦という記述がでてきます。この頃の尾道浦は、まだ港町ではなく、海辺にそった小さな集落であったと考えられます。その集落が瀬戸内海を代表する港町へと発展する契機となったことは、嘉応元年 (1169) に備後国大田庄倉敷地 (年貢米の積み出し港) に公認されたことによります。平安時代には、広大な世羅台地に広がる大田庄は、栄華を誇った平氏の領地となっていましたが、そこで作られた年貢米を京の都へ積み出す倉敷地（港）がありませんでした。そこで、大田庄から近く、天然の良港として機能を備えていた尾道を大田庄の倉敷地とするよう、嘆願がだされたのです。

これが認められ、港町尾道が成立し、その後急速に発展していくことになります。平家から後白河法皇に寄進された尾道は、さらに文治２年（1186）に大田庄が高野山領として寄進されたことに伴い、同じく高野山領に編入されました。その後の文永７年（1270）には、『高野山文書』によれば、港町尾道に入港する船舶から、津料（関税）を徴収していたことも分かっており、独立した港町であったことをうかがい知ることができます。

中世の港町尾道がどのような町だったのか、絵図等が残されていないため、よく分かっていませんが、そうした町並みの一端を知ることができるものとして、中世の瓦があります。瓦の景観を表す言葉として、「甍」があります。甍は、屋根瓦が美しく並ぶ様を表しています。中世は、お寺や蔵などを火災から守るため、屋根に瓦が葺かれていました。そうした瓦は、尾道遺跡の発掘調査でも数多く出土しています。中世の瓦を知ることで、尾道の 850 年の歴史の一部を知ることができます。

天寧寺の発掘調査の様子

本郷平廃寺

本郷平廃寺跡は、尾道市御調町に所在する古代寺院跡です。本郷平廃寺の存在は、古瓦が採集されていたことから古くから知られていましたが、本格的な調査は、昭和 60 年から 4 ヵ年にわたり、御調町教育委員会が広島県教育委員会および広島大学の協力を得て、保存整備を目的とした発掘調査を実施しています。

発掘調査によって、主要伽藍である塔跡と金堂跡、寺域の南辺に相当すると推測される石垣が検出されました。

創建時期については、出土した複弁蓮華文軒丸瓦が石川寺式（広義の川原寺式）に酷似することから、白鳳期すなわち 7 世紀後半と考えられています。

本郷平廃寺は、尾道市内で存在が確認された唯一の古代寺院であり、古代山陽道や駅家との位置関係、当時の御調地域の繁栄を物語る貴重な歴史遺産です。

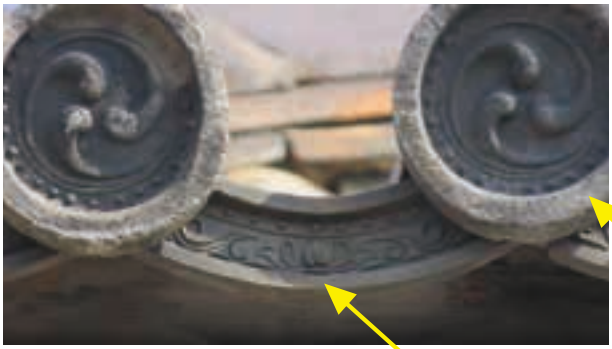
権現廃寺

権現廃寺跡は、尾道市因島中庄町に所在する寺院跡です。現在は、隠島神社や畑地となっていますが、平安時代の寺院跡と考えられています。昭和 34 年に軒丸瓦や軒平瓦が発見されました。

軒丸瓦には蓮華文、軒平瓦には唐草文がみられますが、本郷平廃寺の瓦と比べると、粗雑な印象を受けます。これは、地方で生産された瓦であるためと考えられます。出土した瓦は尾道市重要文化財に指定され、因島史料館で展示しています。

尾道遺跡の中世瓦

尾道遺跡からは、たくさんの中世瓦が出土しています。瓦には、丸瓦と平瓦、鬼瓦などがあり、特に屋根の軒先につく軒丸瓦、軒平瓦は時代によって、文様や制作技法が異なります。瓦を見ることで、その建物の歴史を知ることができるのです。



瓦の文様

尾道遺跡から出土している軒丸瓦の文様は「三巴文（みつどもえ）」です。三巴文は、鎌倉時代から江戸時代にかけて使用された文様で、巴文の形などで制作された年代が分かります。

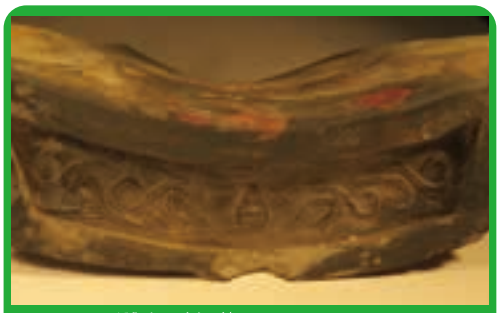
それに対し、軒平瓦は丸い点が連続する「連珠文（れんしゅ）」、中心に蓮華その周りに唐草が描かれた「蓮華唐草文（れんげからくさ）」、中心に宝珠（ほうじゅ）、周りに唐草（からくさ）が描かれた「宝珠唐草文（ほうじゅからくさ）」など、たくさんの種類があります。これらは、時代によって移り変わり、瓦の文様から年代を判別することもできます。

連珠文（れんしゅもん）軒平瓦

蓮華唐草文（れんげからくさ）軒平瓦

連続巴文（れんぞくともえ）軒平瓦

巴（ともえ）文軒丸瓦


宝珠唐草文（ほうじゅからくさ）軒平瓦

橘文唐草文（たちばなもんからくさもん）軒平瓦

瓦は、制作する際に粘土に文様の型（笵型（はんがた））を押し付けて文様をつけます。そのため、同じ笵型の瓦を大量生産することになります。この笵型は、他のお寺の瓦制作の際にも再利用され、浄土寺の瓦と奈良県大安寺（だいあんじ）の瓦が同じ笵型で造られていることも分かっています。

尾道の中世瓦の生産

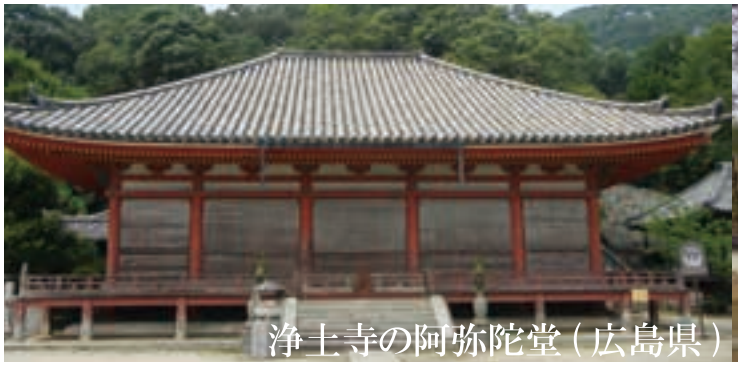
金蓮寺在銘瓦（広島県重要文化財）

瓦の文様で制作された時代を判定していますが、瓦は長く使用され、他の建物に再利用されることもあるため、「建物の建築年代＝瓦の年代ではありません」。瓦の年代を決めるには、文様だけでなく、「その時代に造られたという証拠」が必要になります。瓦には、制作される際に、瓦大工（瓦を制作する職人）の名前や制作年がヘラで刻まれることがあります。このような瓦によって、確かな年代が得られます。

↑写真は、因島の金蓮寺在銘瓦（広島県重要文化財）です。丸瓦と平瓦にヘラで制作者や年代が刻まれています。それによると、瓦は、宝徳２年（1450）に尾道の瓦大工「衛門五郎経次」によって制作され、因島村上氏の配下である宮地大炊助妙光の名前もみられます。

浄土寺阿弥陀堂の瓦にも、銘があるものがあります。阿弥陀堂は何回か改修工事が行われていて、「文明６年（1474）」「大工瓦屋二ノ右衛門」とヘラで刻まれていました。「天正 20 年（1592）」「瓦大工又右衛門」とヘラで刻まれた瓦もあります。

また、岡山県瀬戸内市牛窓の本蓮寺本堂の瓦に「明応６年（1497）、尾道浦大工孫四郎作」との銘があります。



浄土寺の阿弥陀堂（広島県）

本蓮寺の本堂（岡山県）

このように、少なくとも港町尾道に寺社が建ち並ぶ 15 世紀には、尾道に瓦大工が活動していて、尾道だけでなく、瀬戸内の港町などの寺院の瓦を生産していたと考えられます。

戦国時代から江戸時代にかけて港町尾道の豪商として活躍した渋谷氏（大西屋）の文書にも、瓦に関する記録があります。渋谷氏が天正 19 年（1591）に、尾道御所（尾道市東御所町）の瓦屋に 3800 枚を注文した記録が残っています（渋谷家文書）。

尾道の中世寺院の瓦

尾道には、浄土寺、西國寺、西郷寺、天寧寺、常称寺、向上寺のように重要文化財に指定されている中世建造物が多く残されています。これらの建造物には、現在でも中世瓦が葺(ふ)かれていて、軒丸瓦、軒平瓦の文様などで、年代を知ることができます。

浄土寺の瓦

浄土寺本堂と阿弥陀堂の瓦です。軒丸瓦は巴文、軒平瓦は花菱唐草文と蓮華唐草文です。浄土寺本堂は嘉暦２年（1327）、浄土寺阿弥陀堂は貞和元年（1345）に建てられているので、瓦もその頃のものが多く葺かれています。

西國寺の瓦

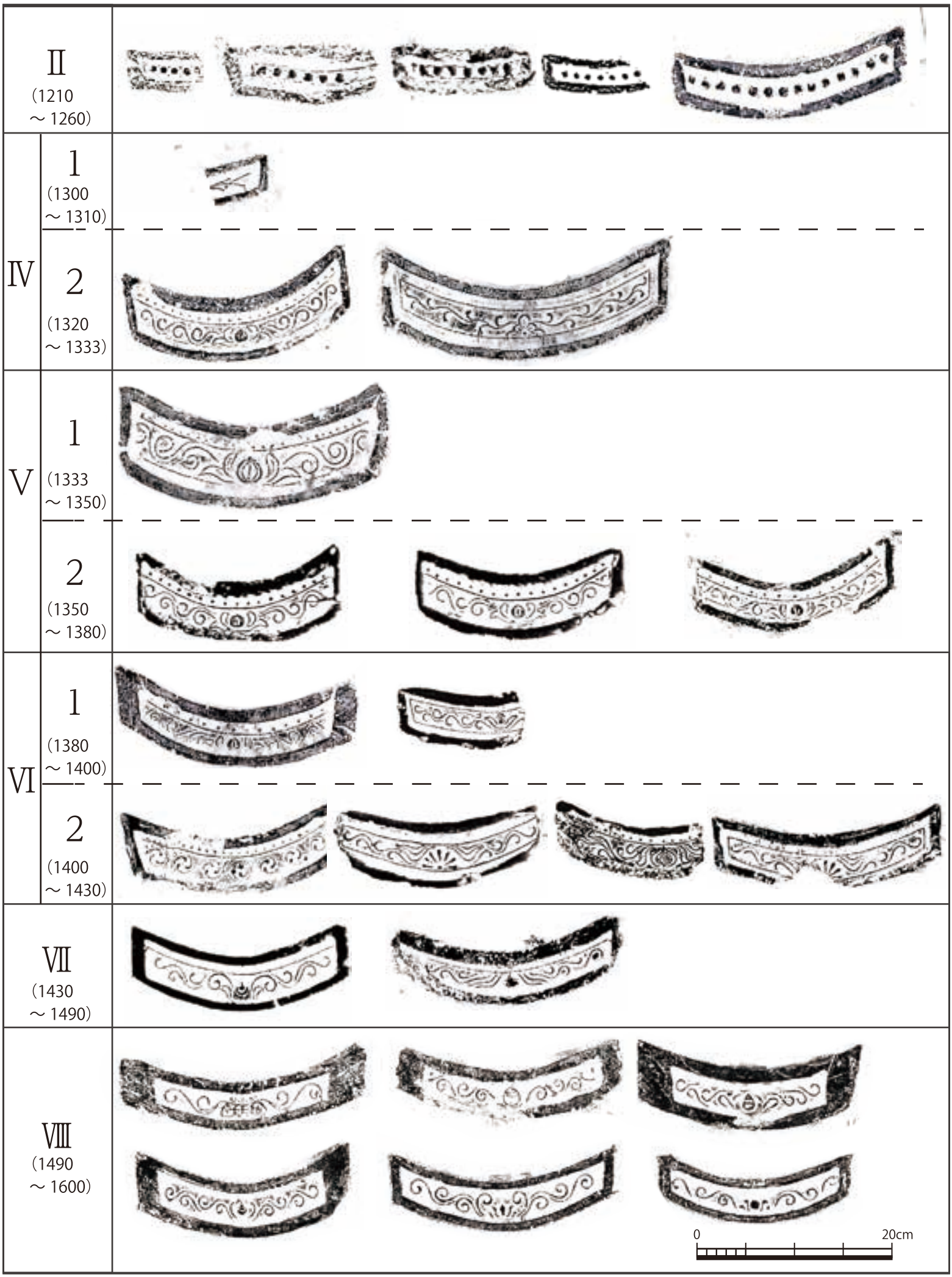
西國寺金堂は、至徳３年（1386）に建てられ、軒丸瓦は巴文、軒平瓦は蓮華唐草文で葺かれています。建てられた当時の瓦も部分的に使用されています。

天寧寺塔婆の瓦

天寧寺塔婆は、嘉慶２年（1388）に五重塔として建てられました。その後、江戸時代の元禄５年（1692）に改修工事を行い、現在の三重塔となりました。軒平瓦には、江戸時代のものが使用されていますが、部分的に宝珠唐草文の軒平瓦も使用され、室町時代の瓦が残されています。

中世尾道の軒平瓦の移り変わり

山崎信二氏『中世瓦の研究』の編年を基にして作成



尾道
古代中世瓦
マップ

『中世尾道の甍』
編集：尾道市企画財政部文化振興課
地域の特色ある埋蔵文化財活用事業

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan